

人であるため嫉妬がないのか、治療者にまつわりついたりねころぶことは無い。お八ツも落着いて食べる。第二一回友達や治療者の注意をひくような行動をするが注意が向かないとねころぶ、前回ちゃんと食べたお八ツを床にはったり治療者にもたれて食べる。二人のままごとに関心を示すがグループに入れない。第二二回少し部屋を無意味にかけ廻り、ねころぶ、治療者が入室すると来て帰ると云う。お八ツは着席して食べる、進んで遊ぼうとしない。第二三回治療者に乱暴をしたり、治療者の頬をなでたり、自分の頬をあててにっこりしたり胸に手を入れたりする。お八ツは着席して食べる。治療者退室後、始め並行遊びであったが、建設的行動になる。第二四回治療者は原則として入室しない事にする。グループに近づくこととする積極性が認められるが、グループには入りきれない。お八ツは自分で椅子を運んで腰かけて食べる。空箱の押しごっこは友達とじゃけんて順をきめ完全にグループに入る。第二五回グループに入りたいがすぐに入る事が出来ない為か友達の注意をひくような行動をする。少しさそわれて遊びに加わるが完全に入りきれない。お八ツは着席して食べる。少し皮肉やいたずらをするが相手にされない。第二六回Sのリードに従って遊ぶ。第二六回すぐにはグループに入れないが自ら友達に話かける。お八ツは着席して食べる。三人で電車ごっこ楽しそう、稍興奮的、第二七回すぐにグループに加り、一心にK・Sのリードに従う。少し乱暴するが友達にさげられてよす。全くグループに入り電車ごっこ。治療前に知能テストをしたが、大へんよく要求に応じた。第二八回余りグループ遊びに入っていない。友達に求められればそれに応じる。終にM・YとK・Yが

積木の箱に入っている上に積木を入れて喜ぶ。

以上二八回をもって治療を中止した。治療中の異常行動はなくなり、家でも友達とすぐ遊べるようになり、小学校入学時のテストも一人であちゃんと受けたという。又小学入学後も特に異常行動はない。治療中の行動から見て、自分に常に愛情をかけてもらいたいという欲求の現れと考えられる、兄の死も後すぐに生れた上に生後病気で重体になった為大切に甘やかされて育った。そこに弟が生まれ、弟は可愛い顔であり、両親は知能も遙かに優れていると思つて居り愛情が弟に向けられた。N・Kは弟に嫉妬を感じ、又愛情不足を感じた。母が友達を選好みした上に転居を八回もしたので友達もなく、弟相手の遊びが主であり、友達に接したい欲求があった。行動だけみると知能が劣っているようであるがIQは129ですぐれている。欲求不満を起している点、即ち彼の欲求する事を受容しなかつた為と考えられる。治療者に抱かれ、乱暴し、絡みつく等の事により、欲求を充したとも考えられる。又後半幼児が少く、グループに入りやすく、他の子供も却つてM・Kを誘い入れ、友達と遊べた事も治療効果が上つたと考えられる。

## 一 施設幼児の社会性の研究

日本女子大学

児 玉 省

石 井 雅 子

高 橋 昱 子

この研究の対象は東京近在にある一公立の児童養護施設内の三歳乃至六歳の幼児四八名である。もっと広汎な施設児の所謂施設病の研究の一環として行った研究で、明日（五月二十二日午後）報告される保育学会共同研究の中の社会性の研究に使用された社会性調査票を使用した。施設の御好意によって、その直接子供たちの養護に当っておられる保母さんその他の方々の約一カ月間の御協力と、かつ本研究者たちが四泊五日、子供たちと生活を共にして調査した。

この施設は神奈川県下にあるが、東京の施設の一分室で、かつ大部分東京の子供たちを收容しているものなので、学会の東京都の子供たちの調査の結果との比較を試みてみた。以下、両方の子供たちが、多少著るしくちがっているとと思われる点を引き抜いて考察をする。

施設児には、「母を求めて泣く」は普通の子供たちに比べて非常にすくない。これに反して、「他の子供にいじめられると泣く」「かわられると泣く」は非常に多い。また「大人にからかわれると泣く」も、施設児にすくない。「一人になるとこわがる」は、施設児も普通児もほぼ同様である。「暗やみやゆうれいをこわがる」は施設児にすくない。この施設の子供たちは必ずしも貧しい家庭の子供たち、またはとくに母親のない子供たちではない。それで前述の事実は母のない環境への適応ができていることを示すものか。他方子供同志の間の関係の絶対量が多いからかも知れないとも考えられる。また多人数生活することによって暗やみの恐怖を、持ち合わせなくなっているようである。

「大人の目にとまるとすぐいたずらをやる」「しかられぬように気をくばる」は施設児も普通児もほとんど差がない。しかし、「自分のしたいことがほかの子供に邪魔されるとおこる」は施設児にはるかに多い。これらの点も前述したところと似ていて、施設児の方が子供同志の関係で、泣いたりおこったりすることが多いのに比べて、対大人との関係では逆にすくない。また、子供同志の関係で、「わがままである」は施設児の方が高率である。これらの点が、施設児の性格を暗示する何ものかであるようである。要するに子供同志の間の関係に問題がある。これは、子供同志の間の関係数が多いという理由だけでは片づけられないようである。

また社会性調査項目のその他の項目について、「非常にすむ」「時々すむ」「一つもしない」の項目のうち、施設児は普通児に比べて、そのどれかに集中して、一〇〇%になってそれ以外の者がしばしば皆無である。普通児にはいつもそういう子供が多少いるのに対して、著るしい対照である。これは施設児の生活がいつも多数の子供との、集団生活をしているために起っている行動の水平化、ひいては発達における水平化の傾向ではないかと思う。ことに、「ほかの子供を誘って遊戯をはじめ」は、施設児がはるかに少ないが、集団生活をしなからこういう点がないのは、多ぜいの集団生活の圧力が、小さいグループ——即ち誰れか誘って小さいグループで遊戯を始めるような——の成立を抹殺するように作用しているのではないであろうか。多ぜいで生活をしながら、一人一人としての親しい関係が、成立し難くなっているのではないかと思う。

「ひとの上に立とうとする」「ほかの子供に母のような愛情をすすむ」

というような項目に該当する者も殆んどいない。「ほかの子供のこと」をほめて話す。「大人に云いつけずには、ほかの子供のあやまりを訂正してやる」も殆んどいない。「競争心がある」「嫉妬心がある」は施設児の方が多い。これを要するに、これらの施設児は、養護の任に当る大人の手でまとめられて、集団生活をしているが、集団内に於ける個人対個人の関係が、難しくなっていると考えることができる。ここに注目すべきことは、集団生活をしながら、「自分のしたことに責任を負う」「まかされたことを責任をもってする」が、一〇〇%だめである。

以上は、普通児と比較するために、著るしい差異を示すものを引き抜いて示したが、この調査票によってみると、施設児はいつも、普通児と比較して、おとっているとかおくられているとかいうことはできないようである。前述した項目のなかにも、一、二あったが、その他、「友達仲間から除け者にされたり、馬鹿にされたり」する者は非常にすくない。これらの点では、施設児の方がむしろ、進んでいるかも知れない。勿論これは、調査した施設についての話だけである。研究をお許し下さった施設に対して厚く謝意を表する。

## 幼児の遊びの観察

運動場における新入児と二年保育児との関係

第 2 日

名古屋大学 旭 妙 子

一、序

幼稚園の運動場とは、今まで家族と僅かの近所の子供たちとしか交ったことのない新入児が初めて同じような年の多数の子供と交わるところである。又、そこは二年児や年長児がいて、新入児が自由に遊ぶことのできないところでもある。この中に入って新入児はどのような過程を通して、今の二年児のように自由に運動場を使って遊ぶようになるのであろうか。その実態を明らかにするのが本研究の目的である。私達はこの過程を process を知ることによって、新入児を今よりも早く、無理なく運動場に、ひいては幼稚園生活全体に適応させるように指導する為の資料を得ることができるのである。

ここでは、その第一報告として、一年児と二年児との運動場における関係を観察法によって調べた結果を報告しようと思う。具体的には、一般に、一年児は自分たちだけで遊んでいる時とは、広い運動場の好きな場所でのびのびと遊んでいます。そこへ二年児が入ってくる。それが何らかの変容を受けるといふことが考えられる。それを実証的に明らかにしてみようと試みたものである。

### 二、実験手続

(1) 日時 昭和三〇年五月上旬  
(2) 被験者 名古屋市御東幼稚園男児(年令四〜五才) 一年児、二年児各四五名、計九〇名。

被験者のうち一年児は在園一ヶ月、二年児は一年一ヶ月を経過。

(3) 観察者 名古屋大学教育心理学教室教官四名、学生一〇名、計一四名。

(4) 観察場面 運動場。トロッコ二台、滑り台、ブランコ二台、安全ブランコ、ジャングルジム、鉄棒がある。広さ三八〇坪。